

祇園精舎（平家物語より）

祇園 精舎の 鐘の 声  
諸行 無常の 響 あり  
娑羅 双樹の 花の 色  
盛者 必衰の 理を あらはす  
おごれる 人も 久し からず  
ただ 春の 夜の 夢の ごとし  
たけき 者も 遂には ほろびぬ  
偏に 風の 前の 塵に 同じ

解説 平家物語の冒頭の詩。

語釈 ※祇園精舎Ⅱ中インド舎衛国にあつた世界最古の仏教寺院。釈迦が説法したといふ。精舎は行者の宿所。※諸行無常Ⅱすべてのものは移り変わり一定の状態にとどまらないといふこと。※娑羅双樹Ⅱ娑羅はインド原産の常緑種。双樹は四方に二本ずつ生えた木。釈迦が拘尸那国跋提河辺で入滅のとき、四方の娑羅双樹が一気に枯れて白くなつたといふ。※盛者必衰Ⅱ勢い盛んな者も必ず衰える。

通釈 祇園精舎の鐘の音は、万物は生滅流転し、常住不変ではないことを伝える。

釈迦入滅時に白くなつて枯れたといふ娑羅双樹の花の色は威勢のある者も必ず滅びてしまうものであるといふ道理を表している。奢り高ぶつた人もいつまでも驕り高ぶつてゐることはできない。ただ春の夜の夢のように儚いものである。勢いのあつた者も最後には滅びてしまう。全く風の前の塵と同じである。